

2014年5月25日 主日礼拝

説教 失樂園

創世記3章6-19節

【二つの生き方】

ここには二つの生き方が鮮やかにされています。「神さまと共に生きる生き方」と「そうでない生き方」。神さまと共に生きる生き方は、神さまを喜ぶ生き方。神さまの与えてくださる良きものをころから楽しむ生き方です。女が蛇に会うまで、彼らはそのように生きていました。神さまから許されたすべての果実を、喜び楽しみました。また、神さまから禁じられたことにも、その言葉通りに従いました。神さまが彼らの喜びだったからです。彼らは神さまの禁止の中にさえ、喜びを見いだしました。禁止を喜んだ、楽しんだという、ふうがわりですが、彼らは禁止のことばにも滲（にじ）む神さまの愛を、喜び楽しんだのでした。

【裸と恐れと恥】

神さまと共に歩かない生き方、神さまを喜びとしない生き方。その生き方を選んでしまったとき、男は「…私は裸なので、恐れて、隠れました」(10)と言いました。今までも彼らは裸でしたが、この裸にはちがひがあります。神さまの腕の中の裸と腕の外の裸です。彼らは神さまの愛の呼びかけさえ、恐れます。愛してくださる神さまを恐れるようになって

てしまったのです。なんとも、残念なこと。悔やんでも悔やみきれない思いがします。神さまのみ声を恐れるとは！そして彼らは神さまから隠れようとします。自分の存在そのものを神さまから隠し、神さまから忘れられようとします。ただひとつのいのちの源は神さま。その神さまから、忘れられようとする。逃（のが）れようとするのです。死とはいのちから離れること。罪は死をもたらします。罪は、人の心から、神さまの腕の中にいたいという願いを押し出してしてしまうのです。

【あなたは、どこにいるのか】

神さまが人を探しに来られました。いつもであれば、男と女は、神さまの声を聞くと走り寄ったはずです。けれども、男と女は恐れと恥にまみれて、身を隠してしまいます。愛してくださる神さまを、自分から避けてしまったのです。男と女のために、どんなことでもする覚悟ができていた神さま。主イエスの十字架までも覚悟しておられる神さま。それなのに、その神さまから隠れるとは！神さまはあわれみに胸を熱くなさったにちがひありません。そして、ささやかれました。「あなたは、どこにいるのか。」(9)と。

神さまは、このようなお方。私たちをひとりひとり訪ねてくださる神さま。祝福するときにも、取り扱われるときにも。十把一絡（じゅうぱいつらから）げに、機械的に、というこ

とがありません。私たちひとりひとりと特別な関係を結ぶ神さま。その神さまが男と女を訪ねてくださったのでした。それは裁きと共に贖いを伝えるため。やはり、愛からの訪問でした。

私たちは、みな、訪ねてくださったかみさまに「はい、私はここにおります」と言ったひとりひとりです。そして、裸の恥のまま神さまの腕の中に抱かれました。とりつくろうこともできない裸のまま、私たちは神さまの腕の中に抱かれています。そのために主イエスが十字架の血を流してくださいました。神さまはアダムとエバを呼んただけではありません。私たちも呼び、私たちとの交わりを求めて、おられます。F・B・マイアーはこう記します。「なぜ、礼拝に集わないのか。なぜ、祈りの場にあらわれないのか。なぜ、聖書を開いてわたしと会わないのか」と。ほんとうに不思議なことですが、私たちよりも、神さまのほうが、私たちとの交わりを求めてくださっているのです。

神なき自由を求めた男と女は、恐れと恥の奴隷となりました。そして、たがいを愛で覆い合うという自由も失いました。けれども、神さまにもどった私たちには自由があります。ふしぎなことですが、神さまの腕の中にだけ本当の自由があります。神さまの腕の外にはない自由が回復されているのです。